

高崎市文化財調査報告書第379集

三ツ寺村前道下遺跡

宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2016

高崎市教育委員会
大一建設株式会社
スナガ環境測設株式会社

例 言

- 1 本報告書は、宅地造成に伴って実施した^{みつせらむらまもみかしらいでき}三ツ寺村前道下遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡の発掘調査から報告書刊行に至るまでの費用負担は、大一建設株式会社によるものである。
- 3 調査は、高崎市教育委員会（教育長 篠野 真幸）の指導のもとに、委託者 大一建設株式会社（代表取締役 大沢 泰）の委託を受け、スナガ環境測設株式会社（代表取締役 須永 真弘）が実施した。
- 4 遺跡の所在地 群馬県高崎市三ツ寺町字村前道下967-1、968-2
- 5 業務監督員 矢島 浩（高崎市教育委員会 文化財保護課）
- 6 調査担当者 権田友寿（スナガ環境測設株式会社）
- 7 発掘調査期間 平成28年6月1日～平成28年6月30日
- 8 整理期間 平成28年7月1日～平成28年8月31日
- 9 調査面積 113.8 m²
- 10 出土遺物は、高崎市教育委員会が保管する。
- 11 調査・測量計画を須永（測量士第52614号）、調査担当を権田、調査員を瀧澤典雄、重機オペレーターを松井直人、測量を山口慶太・夏原淑子・星野陽子・津金寿美子、写真撮影を権田、作業事務を須永豊、安全管理を金子正人が担当した。
- 12 本書は、高崎市教育委員会指導のもと、スナガ環境測設（株）が作成に当たり、原稿執筆…Ⅰについては業務監督員の矢島が、その他は権田が担当した。遺構のトレースと版下作成を権田・夏原が担当した。
- 13 自然科学分析は、スナガ環境測設株式会社 須永薫子（農学博士）が行った。
- 14 発掘調査参加者（敬称略）
長 澤 俊 男 星 野 陽 子 津 金 寿 美 子 鈴 木 政 江 夏 原 淑 子

凡 例

- 1 遺跡調査番号は682番である。
- 2 実測図の縮尺は、次のとおりである。
遺跡平面図（1/100・1/60）、遺構断面（1/60）を使用した。
- 3 本文中の（ ）は推定値、[]は現存値を表す。
- 4 挿図に国土地理院発行の20万分の1「字都宮」・「長野」、2万5千分の1「前橋」、1下室田」、の都市計画基本図を、迅速測図は2万分の1「金子驛」（明治29年修正版）を使用した。
- 5 各遺跡の位置の基準は、世界測地系に基づく座標値を使用。水準点 B. M. 1…125. 200m。等高線 第1面（As-B下遺構）…10cm、第2面（畠下溝跡）…10cm。
- 6 上層断面の色名及び土器類の色調名は、『新版標準土色帖』（農林省農林水産技術会議事務局監修 財団法人日本色彩研究所 色票監修）による。
- 7 上層注記及び本文中には、1783年降下浅間山起因テフラの略称をAs-A、1108年降下浅間山起因テフラの略称をAs-B、6世紀前半降下榛名山起因テフラの略称をHr-FP、6世紀初頭降下榛名山ニッ岳起因テフラの略称をHr-FA、3世紀終末降下浅間山起因テフラの略称をAs-Cとして使用した。
- 8 土層注記中の締は締まり、粘は粘性とし、強・中・弱・なしの4段階に区分した。

目次

例言

凡例

目次

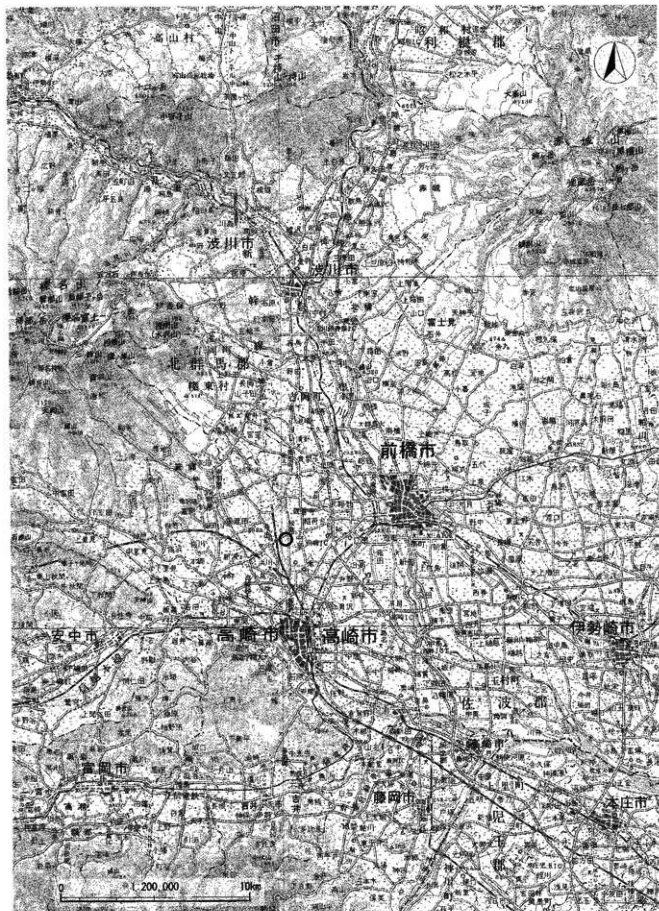
I 調査に至る経緯	1	V 検出された遺構と遺物	
II 遺跡の位置と歴史的環境		1 As-B下の遺構(第1面の遺構)	5
1 遺跡の立地	1	(1) 畠跡	5
2 歴史的環境	1	(2) 1号溝跡	5
III 調査の方針と経過		(3) 土坑・ピット	5
1 調査方針	3	(4) 竪穴状遺構	5
2 調査経過	4	2 第2面の遺構	7
IV 順序	4	(1) 2号溝跡	7
		(2) 土坑	7
		VI まとめ	7
		付編 三ツ寺村前道下遺跡における	
		プラント・オパール分析	9

挿 図

第1図 遺跡位置図		第6図 三ツ寺村前道下遺跡平面図(第1面)	10・11
第2図 周辺遺跡図	2	第7図 2号溝上面・2号土坑平面図(第2面)	12
第3図 基本土層断面図	4	第8図 2号溝平面図(第2面)	13
第4図 迅速測図	6	第9図 遺構断面図	14
第5図 遺跡周辺図	8		

写真図版

- 図版1 三ツ寺村前道下遺跡第1面全景(第1面西から)、
調査前全景(東から)、第1面全景(第1面東から)、
畠跡全景(第1面東から)、畠跡及び土手全景(第1面北から)
- 図版2 1号溝跡及び土手全景(第1面西から)、1号溝跡及び土手全景(第1面北から)、
畠跡・1号溝跡北壁断面(第1面南東から)、1号ピット全景(第1面北から)、
1号土坑全景(第1面北から)、1号竪穴状遺構掘り方全景(第1面南から)
2号溝跡上面全景(第2面西から)、2号溝跡上面全景(第2面東から)
- 図版3 2号溝跡全景(第2面西から)、
2号溝跡全景(第2面東から)、北壁断面全景(第2面南東から)、
攪乱東壁断面全景(西から)、埋め戻し完了全景(東から)



第1図 流域位置図

I 調査に至る経緯

平成28年3月大一建設株式会社から、高崎市三ツ寺町において計画している宅地造成工事に先立つ埋蔵文化財の照会が市教育委員会文化財保護課(以下、市教委と略)にあった。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である奈良・平安No.46遺跡内にあり、工事に際しては協議が必要である旨を回答した。開発計画が具体化した同年3月7日には、市教委へ埋蔵文化財試掘(確認)調査依頼書と文化財保護法に基づく届出が提出され、同年3月11日に試掘(確認)調査を実施した。その結果、平安時代の竪穴状遺構と溝を検出し、埋蔵文化財の所在が明らかになった。この結果をもとに開発者と市教委で協議したが、現状保存は困難との結論に達し、発掘調査による記録保存の措置を講ずることで合意した。なお遺跡名については「三ツ寺村前道下遺跡」とした。

発掘調査は「群馬県内の記録保存を目的とする埋蔵文化財の発掘調査における民間調査組織導入事務取扱要項」に順じ、平成28年5月26日に市教委、開発者大一建設株式会社、民間調査機関スナガ環境側設株式会社での三者協定を締結し、同年5月27日協定に基づき、大一建設株式会社とスナガ環境側設株式会社の間で発掘調査委託契約を締結した。また調査の実施にあたり市教委が指導・監督をすることとなった。

II 遺跡の位置と歴史的環境

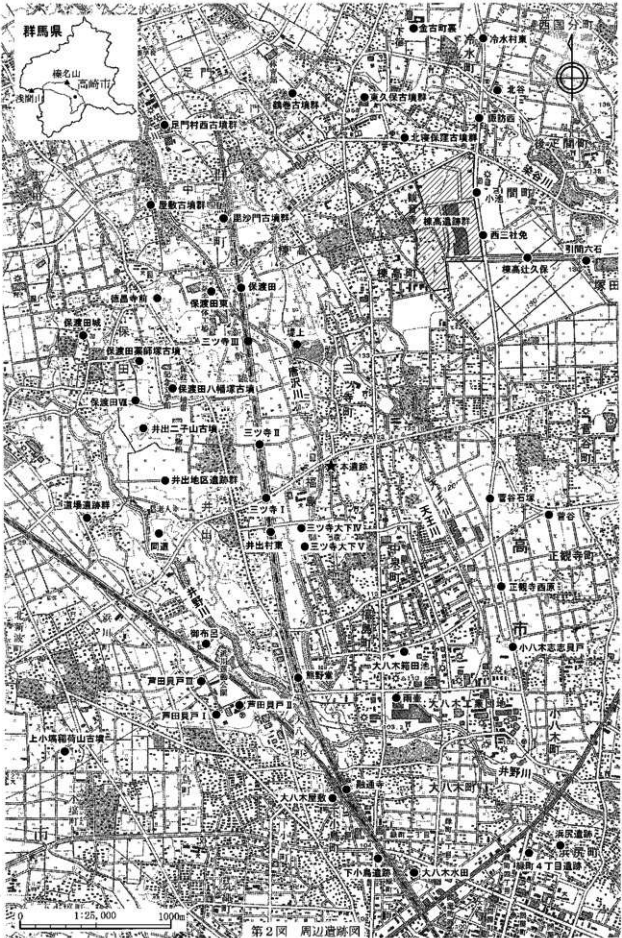
1 遺跡の立地

高崎市の北部に榛名山(標高1,448m)がそびえ、その南東に広がる扇状地が相馬ヶ原扇状地と呼ばれている。この扇状地は、一般的扇状地と異なり火山活動による山体崩壊(陣場岩なだれ)や泥流等が堆積し、約1.3~1.4万年前の浅間-板鼻黄色軽石(As-YP)の堆積前後にかけて拡大したと考えられる。その先端から前橋台地、高崎台地が形成されている。前橋台地は、東の広瀬川低地帯と西は井野川低地帯に画され、高崎台地は、東の井野川低地帯と西は烏川に画された部分である。現在前橋台地中央を南流する利根川は、かつての氾濫原と思われる広瀬川低地帯に沿って流れ、台地縁道をまわっていたと考えられている。本遺跡は、標高124.0m付近にあたり、北西から南東に広がる相馬ヶ原扇状地上にあり、その先端は前橋台地へ移行する。この地帯は、扇状地に源をもつ中小河川が概ね放射状に流下している。また、その流れは複雑に解折し崖線や湧水が見られる。本遺跡はその中の唐沢川の左岸(約80m)にあたり、東方500mほどに南流する天王川に挟まれた微高地上に位置している。

2 歴史的環境

本遺跡周辺の旧石器時代では、大八木町の融通寺遺跡や雨盞遺跡において遺物を出土しているが、遺構は検出されていない。縄文時代では、三ツ寺II遺跡で前期中葉、熊野堂遺跡で前期後半の竪穴建物を確認し、保波田VII遺跡では前期中葉から中期中葉の土坑が検出された。小八木志良戸遺跡では後期初頭の柄鏡形住居跡が検出され、そのほか雨盞遺跡、箱田池遺跡などで調査されている。

弥生時代では、中期後半からの集落を伴う遺跡が集中するようになり、後期になると井野川縁辺部や支流



の唐沢川流域など市内各所で集落遺跡や水田遺跡が確認されている。本遺跡近隣では三ツ寺Ⅱ遺跡、井出村東遺跡、三ツ寺人下Ⅳ・Ⅴ遺跡、また棟高辻久保遺跡、小八木志志貝戸遺跡において後期のムラ跡が報告されている。

古墳時代では、弥生時代の文化からさらに新しい文化へ継続し、市域全体に及ぶほどになり、さらなる発展をみせている。前期において熊野堂遺跡、保渡Ⅶ遺跡、西三社免遺跡、小池遺跡では微高地上に堅穴建物跡が確認されている。水田や畠跡の遺跡としては、As-C軽石を手がかりに同道遺跡、熊野堂遺跡が調査された。中期においては遺跡数が少なく、まとまった居住域としては小八木志志貝戸遺跡が挙げられる。

後期では三ツ寺Ⅰ遺跡において環濠の居館跡が存在し、一帯が有力豪族の拠点として考えられている。また北谷遺跡にも類似する居館跡が確認されている。居住域としては三ツ寺Ⅲ遺跡、冷水村東遺跡、諏訪内遺跡、保渡Ⅶ遺跡などが調査されている。Hr-F A 下木田跡に御布呂遺跡、芦田貝戸遺跡、熊野堂遺跡、融通寺遺跡、同道遺跡、井出地区遺跡群の各遺跡で調査されている。Hr-F P 下木田跡では同道遺跡で報告されている。古墳では5世紀後半築造とされる井出二子山古墳と近隣の保渡Ⅷ八幡塚古墳、保渡Ⅸ薬師塚古墳は、いずれも凝灰岩製の舟形石棺を有し、墳丘長100m前後の大型前方後円墳であったとされ、相次いで築造されている。その後後期の古墳としては、横穴式石室を有し径50mほどの大円墳の土小輪稲荷山古墳がある。

奈良・平安時代では、律令制度に基づき集落は広範囲に広がり、それにつられて生産域も拡大していった。本遺跡近隣の居住域としては三ツ寺Ⅱ遺跡、三ツ寺Ⅲ遺跡、三ツ寺大Ⅳ・Ⅴ遺跡、堤上遺跡など古墳時代からの集落の継続性が窺える。またAs-B軽石に被覆された水田跡が多く調査され、大八木水田遺跡、芦田貝戸遺跡、御布呂遺跡、同道遺跡、正観寺西原遺跡、棟高辻久保遺跡など、その他非常に多くの遺跡が調査されている。特に大八木水田遺跡では大規模調査により広範囲の条里制水田が確認されている。

Ⅲ 調査の方針と経過

1 調査方針

委託された調査範囲は、試掘調査によって得られた成果に基づき、宅地造成により掘削を受ける道路部分を調査区とした。

本調査は、0.14㎡バックホウを用いて表土掘削を行い遺構確認面を確定し、第1面はAs-B軽石をジョレン及び移植ゴテにより除去を行った。第2面もバックホウを用いて掘削を行い遺構確認面を確定し、ジョレン及び移植ゴテにより精査を行った。座標値は世界測地系に基づく座標値を用いた。水準は調査区に1ヶ所(B.M. 1 H=124.700m)測設した。図面作成については、平面図はトータルステーションによる電子平板を用いた。断面図は遣り方による細部測量で1/20の縮尺を使用し作図を行った。また、遺構等の写真撮影は35mmモノクロ、カラーリバーサル、デジタルカメラの3種類を使用し、埋没状況を観察・記録し調査を進めた。

2 調査経過

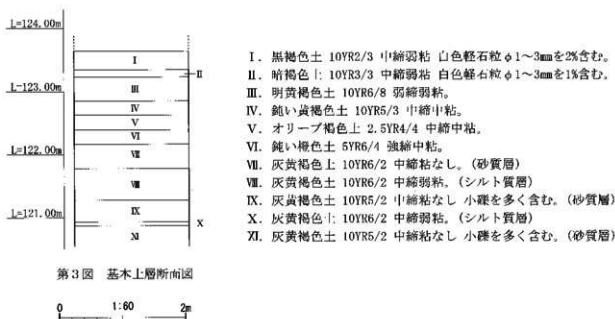
三ツ寺村前道下遺跡埋蔵文化財発掘調査業務について、高崎市教育委員会と大一建設株式会社との協議により発掘調査を実施し、記録保存することになった。

調査は、市教育委員会の文化財保護課の指導、監督のもと、スナガ環境測設株式会社が実施した。

平成28年5月31日から、資材搬入を行い道路沿いには単管とウマによるバリケードとトラロープ等により安全対策を行った。6月1日には事務所を設置し、重機による表土掘削を開始し、遺構確認は監督員の指導を得て行うとともにジョレン掛精査により遺構確認と壁切りを行った。また、ブルーシートにより確認面と壁を保護した。6日から移植ゴテにより吊跡の表面を覆っているAs-B軽石の除去を開始した。7日に公共座標及び水準点の測設を行い、8日から遺構平面と断面の記録保存を始めた。17日に脚立により全体写真撮影を行い、午後から監督員の検査により第1面の調査が終了した。吊跡下の第2面の調査に入ってよいとの許しも得た。第2面の遺構も監督員の指導を得て、検査後から重機による掘削を開始した。18日にジョレンと移植ゴテにより溝の覆土除去を開始し、壁断面図の作製に入った。20日から遺構平面図作製作業を始め、22日に監督員の検査により第2面の調査が終了し、埋め戻しに入るとよいとの許可を得た。プラント・オーバー分析のための土壌採取を行った。27日に埋め戻し及び資材機材の片付け作業を完了した。

IV 層 序

本遺跡の基本土層は、第1面調査の吊跡の東側にある大きな攪乱の東壁土層断面をもとに模式的に断面図を作成し、それについての土層説明を下記に掲載した。この地点は上層を削平されAs-B軽石を失っている場所であるが、他に良好な地点がなかった。また、地点により堆積状態の差異はあるが基本的に第3図に示したとおりである。



- I. 黒褐色土 10YR2/3 中締弱粘 白色軽石粒 ϕ 1~3mmを2%含む。
- II. 暗褐色土 10YR3/3 中締弱粘 白色軽石粒 ϕ 1~3mmを1%含む。
- III. 明黄褐色土 10YR6/8 弱締弱粘。
- IV. 鈍い黄褐色土 10YR5/3 中締中粘。
- V. オリーブ褐色土 2.5YR4/4 中締中粘。
- VI. 鈍い褐色土 5YR6/4 強締中粘。
- VII. 灰黄褐色土 10YR6/2 中締粘なし。(砂質層)
- VIII. 灰黄褐色土 10YR6/2 中締弱粘。(シルト質層)
- IX. 灰黄褐色土 10YR5/2 中締粘なし 小礫を多く含む。(砂質層)
- X. 灰黄褐色土 10YR6/2 中締弱粘。(シルト質層)
- XI. 灰黄褐色土 10YR5/2 中締粘なし 小礫を多く含む。(砂質層)

V 検出された遺構と遺物

調査する道路部分はすでに、道路側溝と宅地を区画するコンクリート土留め工事が終わっており、道路路盤も施工されていたため調査区東側は確認面が削平され、さらに攪乱が幅広く深く入っていた。また西側も攪乱が深く入り、As-B 軽石は後世の耕作によって失われており遺構確認が困難であった。本遺跡では、第1面のAs-B下畝跡、溝跡、ピット、土坑、堅穴状遺構、第2面の溝跡、土坑の調査を行った。

1 As-B下の遺構（第1面の遺構）

(1) 畝跡

本遺構は調査区のほぼ中央に位置し、畝面直上にAs-Bが5cm～15cmほどの厚さで純堆積していた。As-Bユニット層は乱れがなく降下後の耕作は行われなかったと思われる。畝面は平坦で畝など検出しなかったが、小ピットが点在しており栽培種等の抜き取り痕であろうか。現存面積は30.08㎡であった。遺物は土師器の甕胴部と須恵器の埴底部で轆轤整形による回転糸切り痕があるものの破片を各1点出土した。

(2) 1号溝跡

溝跡は、大部分を攪乱により壊されていたが畝跡の1mほど西側に掘られており、掘った土は畝側へ廃土し土手を築いていたようすが窺える。凸の用水路として使用していたとは思われない。唐沢川の氾濫など、ある程度の増水では畝跡に流れ込まないように考えられていたのか。確認できた長さは3.46m、上端幅は1.2～2.0m、下端幅は0.5～1.5m、溝の底部標高は北側で123.55m、南側で123.43m、高低差0.12mを測り、流路勾配3.47%、北西からN-144°-Eの角度で南東へ流れていた。遺物は出土しなかった。

(3) 土坑・ピット

土坑とピットは調査区の西側でそれぞれ1基が検出された。1号土坑は、ほとんど攪乱によって失われており北側の一部を確認しただけであった。規模は現存している最大値で上端幅1.22m、下端幅1.40m、深さ0.48mの楕円形と推定される。遺物は土師器の甕胴部と埴底部で僅かに轆轤整形による回転糸切り痕がある破片を各1点出土した。1号ピットも攪乱に半分ほど失われており完全な形で検出できなかった。規模は推定値で上端幅は長径0.55m、短径0.37m、下端幅は長径0.37m、短径0.20m、深さ0.25mの楕円形と推定される。遺物は、土師器の甕胴部の破片1点出土した。

(4) 堅穴状遺構

1号堅穴状遺構は調査区の西端で1軒検出した。東西を攪乱で失っており南側は調査区外に入っている。規模は現存部分で上端幅3.40m、下端幅3.20m、深さ0.40m、面積5.55㎡の円形と推定される。この遺構の使用目的や時期は不明である。遺物は、土師器の甕胴部を1点出土した。



谷底平野および後背湿地

明治29年修正版より一部改定

第4図 迅速測図

2 第2面の遺構

(1) 2号溝跡

第1面の畝跡の下から溝跡を検出した。溝跡の形状は、西側から緩やかに溝底部へ傾斜し、底部から急勾配に上りそのまま溝上端に至らず、テラス状の平坦な部分を有している。東側の上端は深い攪乱の範囲内にあつたと推定され、溝跡の東側上端幅は確認できなかった。規模としては、検出した溝長は3.0m、北西からN-150°-Eの角度で南東へ走行し、現存する溝幅は7.00m、下端幅は0.45~0.70m、テラス状の平坦部の幅は1.60~2.40m、溝の底部標高は北西側で122.14m、南東側で122.03m、高低差0.11mを測り、流路勾配3.67%で北西から南東へ流れていたと考えられる。遺物は土師器の坏、埴、甕、須恵器の坏、埴、甕、大甕の破片や布目瓦の破片など合計82点出土した。

(2) 土坑

2号土坑は2号溝の調査で礫・砂・シルトが最後に堆積した最上位層の上端をジョレンと移植で精査したときに検出された。規模は上端幅0.67~0.90m、下端幅0.55~0.68m、深さ0.14mの楕円形と推定される。遺物は土師器と須恵器の埴胴部の破片を各1点出土した。

VI ま と め

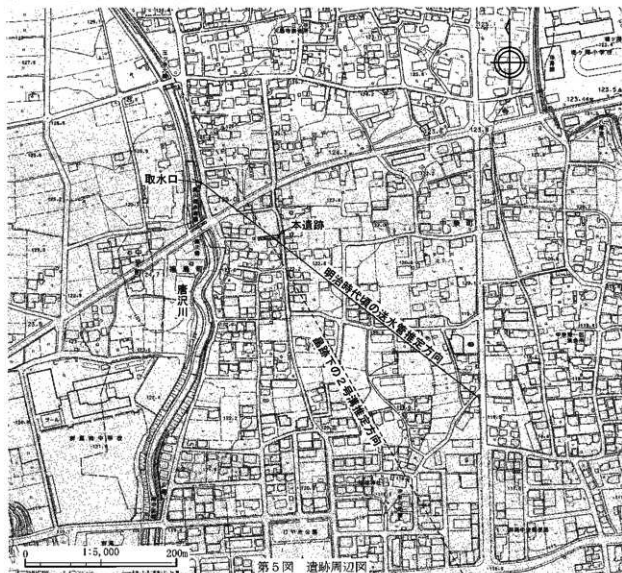
本遺跡は開発道路部分のみで、調査範囲の幅は狭く、長さも短く攪乱も多いため遺構に関し不明な点や確認できなかった部分が多いが、木遺跡の遺構についていくつか検討してみた。

本遺跡で確認されたA₅-B₁軽石の畝跡は報告例が少なく、近隣の遺跡では堤上遺跡や棟高遺跡群で確認され、H₁-F₁A降下以前の畝跡と重複しているものが多く、時代を超えて耕作し続けていたと思われる。本遺跡の畝跡では溝跡(2号溝)と重複していた。また、近隣遺跡では畝を検出しているが、本遺跡では畝を確認することはできなかった。今までに調査された畝跡では畝を作っていたが、畝を作らない畝もあるのではないかと思われる。畝が存在することで調査の時に遺構を認識しやすく、畝がない場合にはそのまま見落とす可能性があると考えられないだろうか。土壌分析からはキビ族(キビ・ヒエ・アワ)が多く検出され、畝跡と言えなくはない結果が出ている。また現在の土地利用は過去の土地利用を映していることや、迅速測図に谷底平野と後背湿地を重ねた地図(第4図)から見ても谷底平野や後背湿地では水田耕作、本遺跡近隣などでは畝作が行われた可能性が大きい。本遺跡の畝跡の西側にはA₅-B₁軽石で埋まった浅い溝が走行しており、溝を掘った土を畝側へ廃土し土手を築いていたようすが窺える。用水路として使用していたとは考えにくく、河川の氾濫など、ある程度の増水では畝に泥水が流れ込まないように考えられていたのか。次に、畝跡の下から検出した第2面の溝跡については、数度に渡る洪水などにより多量の礫、砂、シルト質土を伴う洪水層で埋没し、この際の浸食で当初の形状が著しく損なわれていると思われる。テラス状の平坦部も当初の施設ではなく、洪水がもたらした浸食作用に伴うものである可能性が高い。礫、砂、シルト質土で埋まった溝跡の最上層部(北壁断面図24層)では人間の足跡や2号土坑を確認したが、土壌分析では検出されるものはなく、人間が手を加えられるような築窠ではなかったと考えられる。遺物は土師器の坏、埴、甕、須恵器の坏、埴、甕、大甕の破片や布目瓦の破片など6世紀代から9世紀代の破片を80点余り出土したが、大

多数の遺物は流れ込んだものと思われ、溝が掘られた時期を特定することは難しい。溝の深い部分から出土した遺物は摩滅が顕著で、テラス部分のものはそれほど摩滅はしていないが接合不可能な破片であった。この溝の役割については、耕作地への灌漑用水路であったのか、洪水時の災害防止目的のものであったのか、両方を兼ねたものだったのか不明であるが、A-a-B軽石が降下する前には完全に埋まり、畝を耕作していたことが窺える。また溝跡の走行方向(N-150°-E)を唐沢川まで延長すると、ちょうど河川が蛇行してきた：ツツ大橋の袂に突き当たる。(第5図)当時の河川の流路は不明だが、おそらくそれほどの差異はないと思われる。取水口と考えられる。驚いたことに畝跡の東側にある擾乱は、明治時代のころ唐沢川から水を送るための管を敷設するための掘削跡で、深さ3.0mほどに送水管が敷設されていた。現在も唐沢川に架かる奥川橋から50m上流に取水口としての水門が現存しており、過去の水利が現代に引き継がれているのか。

参考文献

- | | | |
|-----------------------------------|------------------------|---------------|
| 群馬県史 通史編1 原始古代1 1990 群馬県史編さん委員会 | 保徳田徳昌寺前遺跡
三ツ寺大下IV遺跡 | 2001 群馬町教育委員会 |
| 群馬県史 通史編2 原始古代2 1991 群馬県史編さん委員会 | | |
| 群馬町誌 資料編1 原始古代中世 1998 群馬町誌編纂委員会新編 | 足門寺屋敷Ⅲ遺跡
三ツ寺大下V遺跡 | 2004 群馬町教育委員会 |
| 高崎市史 通史編1 原始古代 2003 高崎市史編さん委員会 | | |
| 火山灰アトラス 日本列島とその周辺 1992 町田 洋・新井 功夫 | 保徳田薬師塚古墳 | 2013 高崎市教育委員会 |
| 大八木水田遺跡 1979 高崎市教育委員会 | 榎高遺跡群Ⅰ | |
| 堤上遺跡 1995 群馬町教育委員会 | | |



第5図 遺跡周辺図

付編 三ツ寺村前道下遺跡におけるプラントオパール分析

須永 薫子

1. はじめに

植物ケイ酸体 (プラント・オパール) は植物の細胞内に非晶質含水珪酸が充填することによって形成され、植物が枯れた後にも土壤中に残る物質である。プラント・オパールは花粉等に比べ移動が少なく、かつての表層土であった土壌層位のプラント・オパールを土壤中から抽出し、観察・同定することにより土地利用や環境の変遷を復元することができると考えられている。特にイネに関しては、水田跡の検出方法として研究がすすみ、イネのプラント・オパールが土壌試料 1 g 中に 5,000 個以上、もしくは遺構を伴う遺跡では 3,000 個以上検出された場合、そこで稲作が行われていた可能性が高いと考えられている (杉山・松田 1999, 杉山 2000)。

2. 分析方法

土壌試料採取方法: 土壌資料はガバトボックス (ステンレス製不攪乱土壌資料採取器 12cm×7cm×4cm=378cm³ スナガ環境測定株式会社製) を用いて、層標から目的の層位を不攪乱状態で採取し、室内で各資料を採取した。

プラント・オパール分析: 近藤 2010 による方法に準じてプラント・オパールを土壤中より分離し、400倍の偏光顕微鏡下で同定を行った。同定は、おもにイネ科植物の起動細胞に由来するプラント・オパールを対象とした。

3. 土壌試料採取地点

採取地点を第 6 図に示し、層位については第 9 図 (北翠断面図) を参照されたい。

地点 1 として北翠、地点 2 として南翠から As-B 層直下の層位を採取し、夫々サンプル名を No. 1 (北 As-B F)、No. 2 (南 As-B D) とした。また、足跡が検出された層位 (24 層上部) と同じ層位を地点 1・2 から採取し、サンプル名を No. 3・4 とした。

4. 結果および考察

各層位のプラント・オパールの粒数の観察結果を付編一表 1 に示した。

・As-B 直下の層位について

No. 1 (北 As-B 下)、No. 2 (南 As-B 下) のイネのプラント・オパールは約 1,700 個/g 以下の低い密度であった。3,000 個/g 程度を稲作の判断基準とすれば (杉山 2000)、プラント・オパールの結果からこれらの地点で稲作が行われていなかったと考えられた。キビ族等として、キビ族、給源不明のキビ族類似珪酸体およびヒコエ属などを含む珪酸体を観察した。これらには栽培種以外の多様な雑草等を含むことから耕作との関連は議論できないが、As-B 層直下の層位でキビ族等が検出された。

また、As-B 層直下の層位では植物由来の珪酸体が少なかったが、両試料ともにヨシ属の特徴であるファン型のプラント・オパールやササ属等が検出されず、ススキ属、キビ族が検出された。また珪酸の数も少なかった。以上のことから埋没以前の環境は、イネ科植物の繁茂は少なく、比較的乾燥した環境であったことが示唆された。

・No. 3・4 の層位について

No. 3・4 ともに植物由来の珪酸体が少なく、珪酸の数も少なかった。以上のことから洪水等により堆積し、表土として遺構が形成されたが、イネ科植物等が繁茂し、プラント・オパールが蓄積されるような環境ではなかったことがわかった。

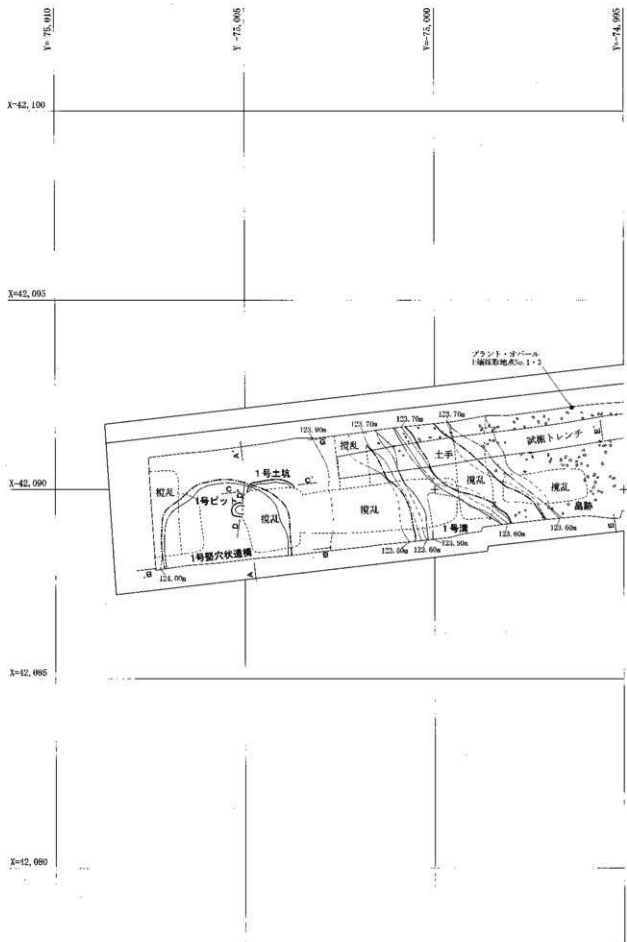
付編一表 1 プラント・オパールの粒数の結果

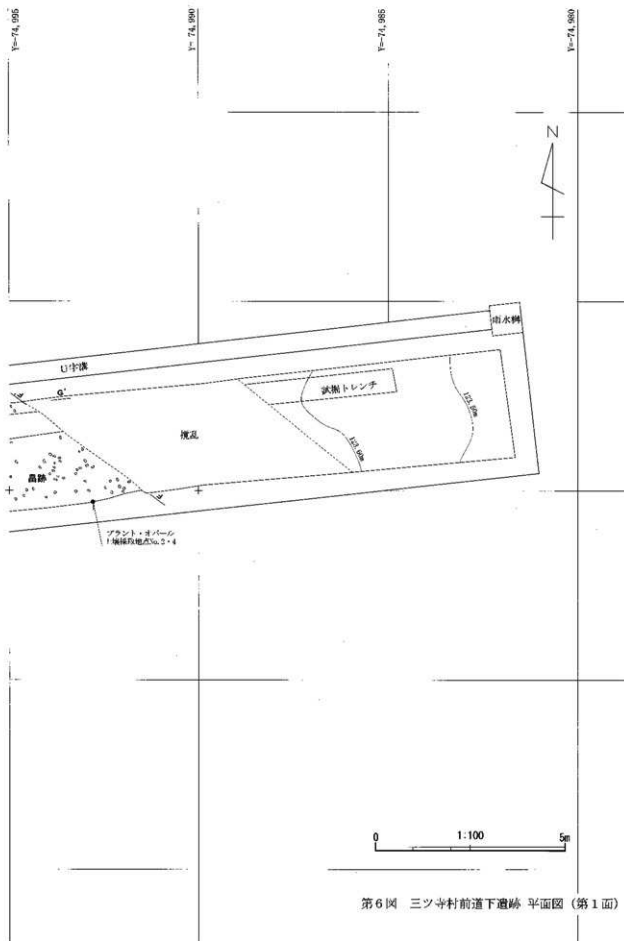
サンプル名称	イネ	ヨシ属	ススキ属	ササ属	キビ族等
No.1(北As-B下)	1.4	-	1.8	-	2.8
No.2(南As-B下)	1.7	-	1.3	-	3.0
No.3	-	-	-	-	-
No.4	0.9	-	-	-	-

(1000個/g)

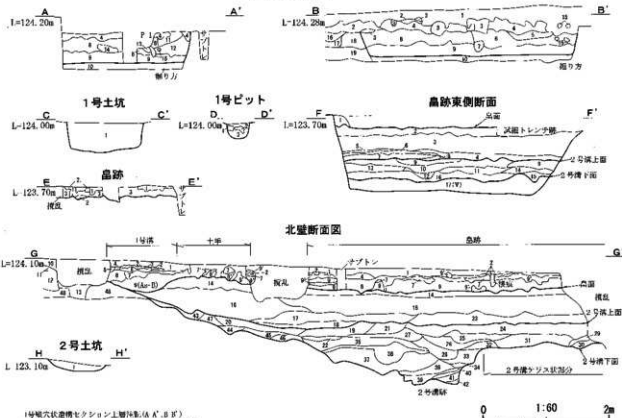
5. 引用文献

- 近藤 輝一 (2010) 植物ケイ酸体分析の実際、プラント・オパール図解、北海道大学出版会、p. 235-244。
杉山 高二・松田 隆二 (1999) 植物珪酸体分析による農耕跡の検証と探索、水田跡・遺跡をめぐる自然科学—その検証と栽培植物—、p. 13-15。
杉山 高二 (2000) 植物珪酸体 (プラント・オパール)、考古学と植物学、同成社 p. 189-213。
古賀 隆 (1995) 群馬県、境上遺跡 (第 2 次調査) における植物珪酸体分析、境上遺跡、p. 88-98。





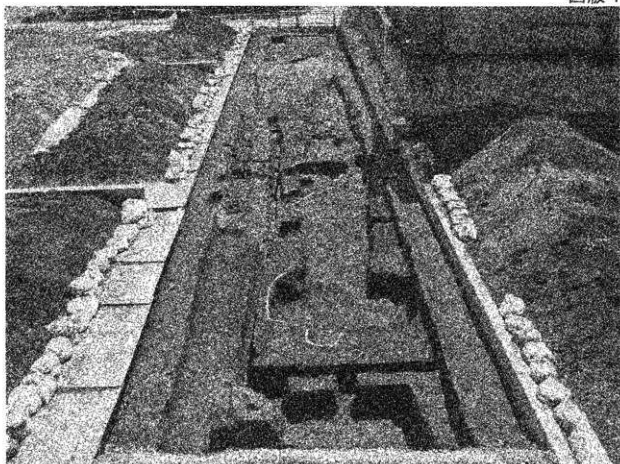
1号整穴状遺構



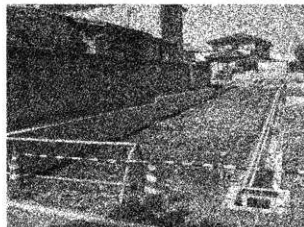
- 1号整穴状遺構セクション土層構成表(A'・B'・D')
- 1 暗褐色 10YR3/3 腐植層 内径約φ1.0~1.5m全高、遺構内(10YR5/0)部、フタを多く含む。
 - 2 褐色 10YR5/1 腐植土 白色砂石約φ1~1.5mを7%含む。
 - 3 黒褐色 10YR2/3 腐植層 内径約φ1.0~1.5m全高、土層を少量含む。
 - 4 黒褐色 10YR2/3 腐植層 白色砂石約φ1~1.5mを2%含む。
 - 5 黒褐色 10YR2/3 腐植層 白色砂石約φ1~1.5mを2%含む。
 - 6 黒褐色 10YR2/3 腐植層 白色砂石約φ1~1.5mを2%含む。
 - 7 黒褐色 10YR2/3 腐植層 内径約φ1.0~1.5mを少量含む。
 - 8 黒褐色 10YR2/3 腐植層 内径約φ1.0~1.5mを少量含む。
 - 9 黒褐色 10YR2/3 腐植層 白色砂石約φ1~1.5mを少量含む。
 - 10 褐色 10YR4/6 焼締腐植層 白色砂石約φ1~1.5mを1%、黄褐色土を少量含む。
 - 11 黄褐色 10YR6/3 プログクを多く含む。
 - 12 褐色 10YR2/2 中級腐植 白色砂石約φ1~1.5mを2%含む。
 - 13 黒褐色 10YR2/2 中級腐植 白色砂石約φ1~1.5mを1%含む。
 - 14 黒褐色 10YR2/2 中級腐植 白色砂石約φ1~1.5mを1%、黄褐色土を少量含む。
 - 15 黒褐色 10YR2/2 中級腐植 白色砂石約φ1~1.5mを2%含む。
 - 16 黒褐色 10YR2/2 中級腐植 内径約φ1.0~1.5mを少量含む。
 - 17 黒褐色 10YR2/2 中級腐植 白色砂石約φ1~1.5mを少量含む。
 - 18 黒褐色 10YR2/2 中級腐植 白色砂石約φ1~1.5mを少量含む。
 - 19 黒褐色 10YR2/2 中級腐植 黄褐色土をブロック状含む。
- 1号土塚セクション土層構成表(C-D')
- 1 暗褐色 10YR3/3 腐植層 内径約φ1.0~1.5m全高、腐植土を多く含む、炭化物と小石を少量含む。
 - 2 褐色 10YR5/1 腐植土 白色砂石約φ1~1.5mを2%含む。
 - 3 褐色 10YR5/1 腐植土 白色砂石約φ1~1.5mを2%、2層の塊状を含む。

- 北壁セクション土層構成表(G-G')
- 1 黒褐色 10YR2/2 中級腐植 内径約φ1.0~1.5mを2%、Aa-Bを多く含む。
 - 2 褐色 10YR5/1 腐植土なし Aa-Bを多く含む。
 - 3 褐色 10YR5/1 腐植土。
 - 4 黒褐色 10YR2/2 中級腐植 内径約φ1.0~1.5mを2%、Aa-Bをやや多く含む。
 - 5 黒褐色 10YR2/2 中級腐植なし 1層とAa-Bを含む。
 - 6 黒褐色 10YR2/2 中級腐植なし Aa-Bを多く含む。
 - 7 褐色 10YR4/6 焼締腐植層 2層のブロックを少量含む。
 - 8 黒褐色 10YR2/2 中級腐植 白色砂石約φ1~1.5mを少量含む。
 - 9 Aa-B層。
 - 9' Aa-B層を少量含む。
 - 9'' Aa-B層を多く含む。
 - 10 褐色 10YR3/3 腐植層 白色砂石約φ1~1.5mを1%、Aa-Bを多く含む。
 - 11 黒褐色 10YR2/2 中級腐植 白色砂石約φ1~1.5mを1%、黒色土ブロックを10%含む。
 - 12 黒褐色 10YR2/2 中級腐植 Aa-Bを多く含む。
 - 13 黒褐色 10YR2/2 中級腐植 白色砂石約φ1~1.5mを1%含む。
 - 14 褐色 10YR2/2 中級腐植 白色砂石約φ1~1.5mを7%含む。
 - 15 黒褐色 10YR2/2 中級腐植 内径約φ1.0~1.5mを少量含む。
 - 16 黒褐色 10YR2/2 中級腐植 白色砂石約φ1~1.5mを少量含む。
 - 17 暗褐色 10YR3/3 腐植層 白色砂石約φ1~1.5mを1%、小石を少量、黄褐色土を少量含む。
 - 18 砂・礫層。
 - 19 砂・シルト・泥層。
 - 20 炭化物なし 10YR1/2 中級腐植 砂・泥・シルト・炭層。
 - 21 砂・泥層。
 - 22 褐色 10YR5/1 腐植層 砂を含む。
 - 23 褐色 10YR3/3 中級腐植 白色砂石約φ1~1.5mを1%、2層をブロック状に10%含む。
 - 24 褐色 10YR3/3 中級腐植 黄褐色土をブロック状に少量、炭化物の塊状あり。(シルト質)
 - 25 砂・礫層。
 - 26 褐色 10YR5/3 中級腐植。(シルト質)
 - 27 褐色 10YR5/3 中級腐植 黒褐色土ブロック状に多く、砂を含む。(シルト質)
 - 28 褐色 10YR5/3 中級腐植 砂を含む。(シルト質)
 - 29 2層と3層の粘土。
 - 30 砂層。
 - 31 砂・泥層。
 - 32 褐色 10YR2/2 中級腐植 シルト質に砂を多く含む。
 - 33 褐色 10YR2/2 中級腐植 黄褐色土ブロック状に10%含む。
 - 34 砂・泥層。
 - 35 砂・泥層。
 - 36 砂・泥層、赤褐色に酸化している。
 - 37 砂・泥層、(シルト質)に腐植土、炭化にむけり未だの塊状が見られる。
 - 38 砂層。
 - 39 砂・泥層。
 - 40 砂・泥層。
 - 41 褐色 10YR5/3 中級腐植。(シルト質)
 - 42 砂層。
 - 43 黒褐色 10YR2/2 中級腐植 内径約φ1.0~1.5mを少量含む。
 - 44 黒褐色 10YR2/2 中級腐植 2層を少量含む。
 - 45 褐色 10YR4/6 焼締腐植層 17層のブロックを含む。
 - 46 砂層。
 - 47 黒褐色 10YR2/2 中級腐植 内径約φ1.0~1.5mを1%、黄褐色土を少量含む。
 - 48 黒褐色 10YR2/2 中級腐植 白色砂石約φ1~1.5mを1%、黄褐色土を少量含む。

第9図 遺構断面図



三ツ守村前道下溜跡第1面全景 (第1面内から)



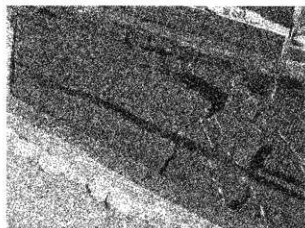
溜在前全景 (東から)



第1面全景 (第1面東から)



石跡全景 (第1面東から)



石跡及び土手全景 (第1面北から)

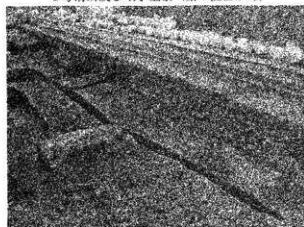
図版 2



1号溝跡及び土手全景 (第1面西から)



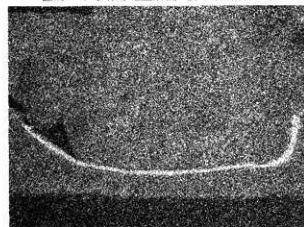
1号溝跡及び土手全景 (第1面北から)



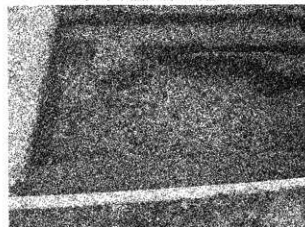
昌郷・1号溝跡北壁断面 (第1面南東から)



1号ヒット全景 (第1面北から)



1号土坑全景 (第1面北から)



1号竈穴状遺構張り方全景 (第1面南から)



2号溝跡上面全景 (第2面西から)



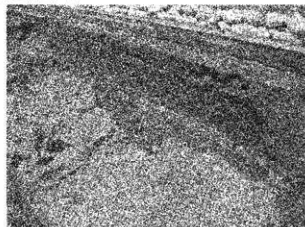
2号溝跡上面全景 (第2面東から)



2号溝跡全景 (第2面西から)



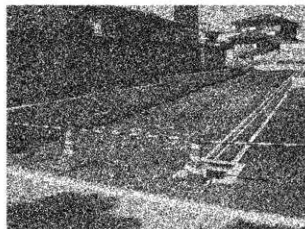
2号溝跡全景 (第2面東から)



北壁断面全景 (第2面南東から)



横土東壁断面全景 (西から)



焼め戻し完了全景 (東から)

抄 録

ふりがな	みつでらむらまえみちしたいせき
書名	三ツ寺村前道下遺跡
副書名	宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書
シリーズ番号	第379集
編著者名	権田友寿(スナガ環境測設株式会社)
発行機関	高崎市教育委員会 文化財保護課 〒370-8501 群馬県高崎市高松町35番地1
発行年月日	西暦2016年8月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		位置		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
みつでらむらまえみちしたいせき 三ツ寺村前道下遺跡	群馬県高崎市 三ツ寺町字村前道下 967-1,968-2	102020	682	36°22'35"	138°59'51"	20160601 5 20160831	113.8㎡	宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
三ツ寺村前道下遺跡	生産跡	平安時代	畚跡 1条 溝跡 1基 上坑 1基 ピット 1基 竅穴状遺構 1基	土師・須恵器片	
		不明	溝跡 1条 上坑 1基		

三ツ寺村前道下遺跡

宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2016年8月23日 印刷

2016年8月31日 発行

発行 高崎市教育委員会
〒370-8501 高崎市高松町35番地1
TEL 027-321-1111

編集 スナガ環境測設株式会社
〒371-0056 前橋市青柳町211-1

印刷 朝日印刷工業株式会社